

2023年5月10日（水）

『 卓話 』

岐阜市スポーツ少年団バレーボール協議会

事務局長 高井 幹夫 様

日頃はスポーツ少年団活動にご理解いただき、ご支援賜りありがとうございます。まずもって、私の不手際で会員の皆様、岡田様、永瀬様には不愉快な思いをおかけしまして誠に申し訳なく思っています。子ども100人の前で話すことは慣れていますが、学識の高い皆様の前では今、声は震え、足もガクガクになっております。

私は、スポーツ少年団活動の目的は子どもたちの成長を助けることだと思っています。一に

家庭、二に学校、次に私たちだと思って頑張っていますが、子どもの成長していく過程は、私たちも通ってきた道ではあるものの、なかなか教えるには難しいところがあります。

以前、NHKの『チョコちゃんに叱られる』の番組で、どうして子どもは走り回るのかという問題がでました。答えは『自らを成長しようとしているから』でした。そんな元気な子供たちにとって、初めて出会うスポーツでもあり、慎重に接しなければいけません。

近くに刑務所があり、その刑務官さんと話す機会があって、黒を白に染めるのが難しいか、白を虹色に染めるのが難しいか、なんて議論したことがありましたが、言い換えれば、私たちの責任は重いものがあると思います。私は無理強い禁物、やる気が出るのを待つのも大事と思っています。

子どもたちに楽しいなと思わせ、それを続けられるようにすることが大切です。練習してもなぜ練習するのかわからないと熱が入りません。そこで、試合を経験することによって練習する意味も解ってきます。そして、頑張らなければということもわかってきます。(30数年前、岐阜県小学生バレーボール連盟にクーデターが起き、新しい役員がこれからは勝敗優先のやり方に変えていくという方針を打ち出しました。それはスポーツ少年団活動ではないと多くの少年団が脱会しました。)

試合数が減った私たちは、少しでも多く、子どもたちが試合体験できるよう、熱い思いをもって北部と西部の代表者が一緒に活動しようと第一回を開催したわけですが、一人の代表者のご主人がロータリークラブの役員さんで、こんな大会なら支援してもらえよとの言葉を貰いました。これがロータリー大会の始まりです。以来、31回も続けさせていただいて、これは私どもにとって感謝しかありません。立派な会場で、きちんとした大会らしい試合が経験できたことは、子どもたちも感激しただろうし、明日につながっていくに違いありません。

私たちの役目は、スポーツの優秀選手を育てるだけではないと思います。できる子、前向きな子は技術を教えるだけで育っていけますが、運動することが今ひとつの子、みんなと同じようにできない子たちもいます。その子たちもしっかり前に進めるように育てていかなければならないと思います。今の子どもたちに共通することは、人の話を聞かない、聞いていても顔は横向いて



いる。教えて聞いてもらえる、理解してもらえるよう、先ずはそこから始めなければなりません。これはすべてのことに共通することです。これからの子どもの成長には大切です。

近頃は子どもの数が減り、活動がままなくなっています。子どもを増やす方法の大事な一つとして、親御さんたちのその団の評判を上げること。あそこに入れば子どもが成長すると思ってもらえるよう評判を上げることも大切なことだと思っています。それで人数が増えれば、より良い活動が望めます。

子どもは思わぬことで変身します。以前、どうしても思うようにできない子がいました。前年度の親の代表者もその子を気にされていて、『あの子、今どうや』って聞かれ、たまたま前の日にサーブがネットを越したこともあって『やっとサーブが入ったよ』と話したら、そのことをその子に『サーブ入ったんだって、監督めっちゃ喜んでたよ』と伝えてくれました。その子もそれを聞いて大喜び、そして、大変身。一番サーバーを任せられる存在になりました。そして、自分の子もスポ少に入れてくれて、私ももっと頑張れば良かったと言ってくれました。

もう1人、これも9人制のときですが、9人の中に入れずにいた子がいました。でも中学校に行って卓球にはまって、猛練習したんでしょうね。自宅に卓球台がありましたから。頑張っついいには東海大会にまで出たとのこと。

そういった先輩のことを卒団する子どもたちの前でそれを氷山の一角として、例え話をします。氷山が見えるのは10分の1です。君たちもちょうど人生の10分の1。残りの10分の9はまだ見えていない。良いことが隠れているよ。その隠れているところを自分で見つけていこうと言っています。中学・高校となっていくと自分の力で生きていくことになります。そういうことが出来る子にして送り出してあげることも私たち大人の使命だと思います。

仲良しチームだけなかなか勝てない。そのチームが最後の試合のとき、監督がいない気持ちのいい試合をやってくれた学年がありました。そのうちの1人が中学校に行ったら絶対バスケと言っていた子が試合で力を出し切り、感激したのか、中学でもバレーを続け、特待生で高校に行った子がいたことも忘れられない出来事です。

腕を上げるには地道な努力がいる。来る日も来る日も同じことの繰り返し。でも楽しいと思わなければ、その毎日は地獄。だが夢さえあれば気持ちは楽しくなる。地道な努力を楽しめるようになれば伸びるはずだよ。短い時間で。それに気づいた日、はじまりがやっと訪れる。そのようなことがわかるようになれば、いいなと日夜思っています。

長々と話をお聞きくださいましてありがとうございました。